

# 目 次

日本語版への序文	i
著者はしがき	v
本書で使用する用語について	viii
凡 例	xviii
コロナイの経済学とその背景	xix

## 第I編 出 発 点

第1章 序論——テーマの領域設定	2
1.1 システム理論のアプローチ	2
1.2 議論の焦点——数理経済学	3
1.3 批判と積極的理論	4
1.4 現代の経済	5
第2章 理論, 数学モデルおよび現実	7
2.1 何を“理論”と名づけるべきか	7
2.2 理論と思考実験	12
2.3 経験科学としての経済理論と決定理論	13
2.4 経済理論と計量経済学	16
2.5 数学モデルの意味	17
2.6 経験科学の成熟度を測る尺度	18
第3章 一般均衡理論の基本思想	20
3.1 サーベイの特徴	20
3.2 基本仮定	21
3.3 概念的枠組	27
3.4 解答を求められている問題	27
3.5 何を同系の学派と見なすか	30
3.6 最初の総括	31

## 第II編 概念と問題

第4章 経済システムの一般モデル	38
------------------	----

4.1 経済システム理論を記述する“言語”	38
4.2 組織とユニット	40
4.3 インプット, アウトプット, 状態	42
4.4 実物域と制御域	43
4.5 財	46
4.6 情報	47
4.7 反応関数——簡単な一例	49
4.8 反応関数の一般的な形	51
4.9 包括的な定義	55
4.10 “オートマトン”としてのユニットと経済システム	56
4.11 広く使われている経済学的概念との対比	58
4.12 対比	61
<b>第5章 情報構造</b>	<b>64</b>
5.1 情報フローの主要な三つのカテゴリー	64
5.2 情報フロー分類の続き	66
5.3 情報フロー構造の複合性	69
5.4 価格性情報フローの構造の複合性	73
5.5 制御サブシステム	76
5.6 対比	79
<b>第6章 多レベル制御</b>	<b>84</b>
6.1 統御-従属のタイプ	84
6.2 垂直関係と水平関係の一般的概念	88
6.3 情報フローにかんする補足	91
6.4 現実のシステムは多レベル・システムである	91
6.5 対比	94
<b>第7章 機関内部の対立と妥協</b>	<b>97</b>
7.1 機関の概念	97
7.2 生産企業の職能的組織	97
7.3 動機づけの多様性	99
7.4 対立と妥協	100
7.5 受け入れられる妥協	103
7.6 対比	105
7.7 復習——ミクロ構造	106

<b>第8章 意思決定の過程</b>	<b>108</b>
8.1 意思決定および要素決定過程	108
8.2 可能な決定代替案	110
8.3 決定探求に関与する各種の代替案集合	112
8.4 意思決定の選択	116
8.5 国民経済における計画策定の例	118
8.6 対比	119
<b>第9章 決定アルゴリズム</b>	<b>122</b>
9.1 決定アルゴリズムの一般概念	122
9.2 制定された規則と慣例	124
9.3 習慣的決定過程と根本的決定過程	125
<b>第10章 選好・効用関数・合理性——サーベイ</b>	<b>132</b>
10.1 選好順序の概念について	132
10.2 動学モデルと静学モデル	134
10.3 “顕示選好”	135
10.4 反復決定と非反復決定, 比較可能な決定と比較不可能な決定	139
10.5 確定的決定と不確実性	140
10.6 実証的理論と規範的理論	141
10.7 適用領域——消費者・企業・政府	142
<b>第11章 選好・効用関数・合理性——批判</b>	<b>144</b>
11.1 実証的静学モデル	145
11.2 比較可能な諸決定の無矛盾性	145
11.3 意思決定の環境の変化	147
11.4 意思決定者の相対的位置の変化	150
11.5 選好に影響するその他の作用	152
11.6 不確実性	154
11.7 意思決定過程の説明における余計な環	158
11.8 賢明な行動の規範	160
11.9 政府の意思決定	164
<b>第12章 要求水準・強度</b>	<b>167</b>
12.1 要求水準の概念	167
12.2 外延的指数の記号表示	172
12.3 緊張	173

12.4	要求水準の形成について	174
12.5	要求水準から意思決定まで	175
12.6	要求水準から意思決定まで(国民経済の計画策定を例として)	179
12.7	内包的指数——具体例による説明	181
12.8	経済上の具体例	182
12.9	強度の定義	185
12.10	対 比	187
第13章	システムの自律機能	190
13.1	生物体によるアナロジー	190
13.2	自律機能——第1近似	191
13.3	在庫と予備	193
13.4	自律機能と高次機能の区分	196
13.5	おもな命題——対比	200
第14章	適応と淘汰	203
14.1	生物界の適応と淘汰	203
14.2	第1次適応と第2次適応	204
14.3	適 応 性	205
14.4	淘 汰	211
14.5	対 比	214
14.6	“量子経済学”	215
第15章	分類と集計	219
15.1	個別的記述と集計	219
15.2	投資関数の例	220
15.3	分 類	224
第16章	経済システムの機能の総合的特性	227
16.1	要望条件	227
16.2	システムのパフォーマンス	230
16.3	システムの比較	232
16.4	対 比	233
第Ⅲ編	市場における圧力と吸引	
第17章	市 場	238

17.1	テーマの設定	238
17.2	要素契約過程	239
17.3	市場の定義	244
17.4	市場の情報構造	244
17.5	対 比	245
第18章	需要と供給, 購買目標と販売目標	247
18.1	通 説	247
18.2	制御過程と実物過程の境界設定	248
18.3	販売目標と購買目標の成熟	251
18.4	販売目標, 販売量, 生産量および在庫量間の関係	255
18.5	対 比	256
第19章	圧力と吸引	258
19.1	“品不足”	258
19.2	購買目標の余剰ない修正	260
19.3	買い手の要求の緊張度	261
19.4	品不足状態における売り手	266
19.5	売り手の“順番待ち”	267
19.6	総括的定義と命題	270
19.7	観測と測定の問題	274
19.8	需要関数と供給関数について	276
19.9	対 比	278
19.10	歴史的出発点	279
第20章	量 と 質	281
20.1	自動車と繊維の例	281
20.2	量的増大	283
20.3	質の概念	285
20.4	画期的新製品	287
20.5	漸進的製品改良	292
20.6	世界的水準への追従	293
20.7	品質の信頼度	295
20.8	V活動とQ活動	296
20.9	対 比	297
第21章	不均衡の帰結	300

21.1 産出量, 投入	300
21.2 品 質	302
21.3 力関係と競争	308
21.4 適 応	310
21.5 淘汰と集中	312
21.6 売り手と買い手の間の関係	317
21.7 各種の効果についてのサーベイと逆方向の要因	318
21.8 緊 張	320
21.9 強 度	321
21.10 規範的見地	325
21.11 対 比	326
第22章 緊張の再生産	330
22.1 テーマの設定	330
22.2 吸引—消費者の目標	331
22.3 吸引—“緊張した”生産計画, 構造的アンバランス	333
22.4 吸引—投資	334
22.5 吸引—全体のサーベイ	337
22.6 圧力の再生産	339
22.7 圧力から吸引への移行およびその逆の場合	343
22.8 エピソード—ハンガリーの経済管理改革	345
22.9 対比—超過供給と超過需要	348
22.10 対比—マクロ経済学とミクロ経済学	350
22.11 研究課題	351
第23章 市場と計画化	353
23.1 二つの極端な見解	353
23.2 二つのサブシステムの比較	354
23.3 市場と計画との結合比率を決定する諸要因	356
23.4 対 比	361
第IV編 学説のサーベイと将来への展望	
第24章 学説史上の先行理論と同系諸学派	366
24.1 第IV編の議論の概要	366
24.2 先行学説のサーベイ	367
24.3 消費の理論, 生産の理論, 市場の理論	368

24.4 パローネとランゲの社会主義モデル	370
24.5 社会的厚生関数, 社会的次元での最適化	370
24.6 潜在価格によって制御される経済	372
24.7 新自由主義	375
24.8 生産価格	376
24.9 一般均衡理論と政治	378
24.10 欠陥が固定化される理由	380
第25章 均衡理論の改良と新しい潮流	385
25.1 改良と離脱	385
25.2 伝統的な基本仮定を緩める試みについて	386
25.3 経済学の新しい潮流—数学的モデル	390
25.4 経済学の新しい潮流—叙述的研究	394
25.5 経済システム理論の分裂状態	396
第26章 結 び	398
参 考 文 献	403
人 名 索 引	421
事 項 索 引	426
訳者あとがき	437